藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

ホスピタリティー

世はまさに高齢化社会。二〇〇八年の日本男性の平均寿命は七十九・二九歳。女性は八十六・〇五歳である。

ひと昔前「人生五十年」と言われた。私は昭和三十七年に就職したが、当時の定年は五十五歳、今は六十歳。さらに六十五歳ぐらいまでは嘱託などで働ける。

となると男性は六十五歳から八十歳までの十五年間をどう生きるかが問題だ。

働いている間は、それが生きる本当の目的ではないにせよ、日々の生活の目標になる。しかし仕事がなくなると自分で目標を見つけなければならない。

セミの抜け殻のような状態で日々を何となく過ごすのではあまりに情けない。組織や肩書きがなくとも晩年の十五年間をどう前向きに生きるかに人生の真価が問われる。

今回、カンボジアの貧しい人たちを支援する〝バッタンバン友の会〟のスタディ・ツアーに参加し、団長のカンガス神父の生き方に身近に接し、自分が高齢者の一人としてこれからどう生きるべきかのヒントをもらった。

カンガス神父は八十三歳、いつも笑顔。大きな教会の主任司祭という肩書きがなくなっても、与えられた環境の中で意欲的にバッタンバン友の会の活動に取り組んでおられる。

それも支援だけではない。今回のように現地の貧しい人たちを訪ねるスタディ・ツアーを毎年実施して自らも参加し、参加者の先頭に立って行動される。

さらに手品の道具を持参し、訪れる先々で「パヒ、パヒ」（クメール語でマジック）と大声でじゅ文を唱えながら子どもたちを手品の世界に誘う。多い時は一日四回も。どの面から見てもホスピタリティーを強く感じる。

ホスピタリティーは「親切にもてなすこと」だが、似た言葉に「ホスピタル」「ホスピス」がある。ホスピタルは病院、慈善施設という意味もある。ホスピスはもともと巡礼者の宿泊所や貧困者の収容所という意味だったが今は末期ガンなどの患者の苦痛を弱め、残された時間を充実して生きられるようにする施設の意味に使われる。

残された時間を充実して生きたいのは末期ガン患者だけではない。高齢者も同じだ。

カンガス神父のようにホスピタリティー、ホスピタル、ホスピスを一緒にした〝ホスピタリティー精神〟で生きることが、仕事を終えた高齢者が輝いて生きる道のように思い始めた。

ホスピタリティー精神とは、私流に言えば単に人を親切にもてなすだけではなく、相手への気配り、思いやり、コンパスの中心を自分から少しでも他者にシフトする生き方だ。

今回のカンボジアの貧しい人たちの訪問で貧しさの中にある豊かさに心を動かされた。

幸福は豊富な富、高い社会的地位、名声の中にあるのではない。日々の生活の中で出会う他者に対しホスピタリティーであることだ。

自分の家がホスピスであり、訪れてくるかもしれない人のために庭を掃除し、玄関に花を生けておこう。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

手品師・カンガス神父の熱演

熱心に見入る子どもたち